

平安朝仏教説話集にみる観音信仰

石 橋 義 秀

はじめに

平安朝時代に編纂された『靈異記』以下の諸仏教説話集には観音菩薩に関する話がかかなり多く見られる。即ち、『靈異記』に十八例あるのを始め、『三宝絵詞』に三例、『極楽記』に三例、『法華験記』に十七例、『今昔物語集』に八十二例ある。(72ページへ補註を参照)

そこで、これら仏教説話集に観音菩薩に対する信仰はどのように現われているか次に考察してみたい。但し、本稿では紙数の関係で『靈異記』・『法華験記』・『今昔物語集』の観音靈験譚を中心に検討しようと思う。

先ず、一般的に観音菩薩に対する信仰について簡単に述べることにする。

観音菩薩とはどういう菩薩であるかと言うことは簡単に言えないが、大体次の二つに大別して考えてよいと思う。即ち、一つは観音を独立した菩薩とする説である。この菩薩は維摩詰経、放光・光讚般若経等の諸経典に見えてゐるが、華嚴経には観音菩薩は南海補陀落山に住すとあり、法華経観世音菩薩普門品には観音菩薩の娑婆世界における利益の様相が詳しく説かれている。今一つは観音菩薩を阿弥陀仏の脇侍とする説である。大無量寿経には観音菩薩は阿弥陀仏の脇侍であるとし、観無量寿経には西方願生者が命終らんとする時、観音菩薩は阿弥陀仏に従って、勢至菩薩及び聖衆と共にこの土に來現し、蓮華台を持して

その人を迎接し給うとある。この二系統の観音は直接には結びつかないようである。後に述べるが、平安朝の仏教説話集に見られる観音の大部分は、前者の独立的な観音である。

ところで、観音信仰は日本ではいつ頃からあったかと言えば、仏教伝来の初期からであろうかと思われる。法隆寺の金銅観音像や百済観音像は飛鳥時代末期から白鳳時代初期にかけて造られたと言われており、御物の辛亥年銘の観音像や、観心寺の戊午年銘の観音像、或いは鰯洲寺の壬辰年銘の観音像等も白鳳時代に造られたと言われている。文献の上では、『日本書紀』天武天皇朱鳥元年(六八六)七月

の条に、「諸王臣等、天皇の為に、観世音像を造れり。則ち観世音経を大官大寺に説かしむ。」^①とあり、次いで、持統天皇三年(六八九)四月及び七月の条にも観音像に関する記事が見られ、観音信仰は白鳳時代にはかなり広く行なわれていたものと思われる。そして、奈良時代には観音像を造り観音経を写すことが盛ん行になわれた。その造像の中には東大寺法華堂の不空羂索観音像、唐招提寺の千手観音像・十一面観音像、聖林寺の十一面観音像など有名な菩薩像がある。また『続日本紀』や『正倉院文書』等に観音経の書写のことが記るされている。さらに、平安時代には

坂上田村麿は清水寺を建立し、藤原冬嗣は南円堂を建てて不空羂索観音像を安置した。この時代の観音像制作は、法華寺の十一面観音・薬師寺の十一面観音・観心寺の如意輪観音など非常に多く見られる。そして平安時代の末期になると、三十三所の観音巡礼が興り、観音信仰は広く普及した。また、平安時代の中期以後、西方浄土信仰の興隆と共に、観音は聖衆来迎における重要な役割を演ずるようになり、さらには海住山寺の十一面観音二十五菩薩来迎図に見られるように、観音菩薩は来迎の主尊と信じられるに至ったのである。

※ ※ ※

さて、平安朝仏教説話集に、観音菩薩に対する信仰はどのように記るされているであろうか、次に見ていきたいと思う。

一

先ず、『靈異記』に観音靈験譚は十四例(巻上の⑥・⑪・⑬・⑭・⑮、巻中の⑱・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔、巻下の⑵・⑶・⑷・⑸・⑹)ある。勿論、これ以外にも観音菩薩に関する記事が見られる(巻上の㉖、巻中の⑴・⑵、巻下の⑶)が、それらは観音菩薩の靈験を記ることを主眼にしたものではないので、今

は取りあげない。

さて、右の十四の観音靈驗譚の内、巻中の(㉗)・(㉘)・(㉙)の三話は、「観音の銅像、鷲の形に反化して、奇しき表を示す縁」(中17)、「観音の木像、神力を示す縁」(中36)、「観音の木像、火難に焼けず、威神の力を示す縁」(中37)とあるように、いずれも観音像が盗難・火難等にあつて、観音像みずから「神力」・「威神力」を示すという靈威譚である。編者景戒は、この観音像奇蹟譚の結末に「誠に知る、理知の法身、常住無きに非ず。不信の衆生に知らしめむが為に示す所なることを。」(中36)などと記るしており、観音菩薩が不信の人々を信仰に導くため、自ら靈驗を示されたのであると考えられていたことが知られる。

それに対して、その他の十一話は、人々が観音菩薩に祈念し、その利益を蒙るといふ利益譚である。例えば、巻上の(6)には、高麗に渡った僧行善は戦乱にあり、難を避けようとして行く途中、大河に到ったが、橋も舟もなく到し方なく「心に観音を念ずるに、即時に老翁舟に乗り、迎へ来たり」行善を助けた、その舟は忽に消え失せたので、行善は「観音の応化」であるとして、誓願を発し、観音像を造って供養したとある。この場合は、急難を免れんが為に観音を念じ、その加護を蒙ったのであるが、他の場合はど

うかと言うと、或者は金銭財宝・女性などを得んことを願ひ、或者は病の回復を願ひ、或者は急難をのがれんことを願って観音に祈念している。要するに、大抵の者は観音に現世の利益を願ったのである。

なお、観音の利益を得るために人々ほどのような善根を積んだのかと言うと、観音像を造立・図絵した例も二・三見られる(巻下の(7)・(8)・(9))が、大抵の場合は特別な善根を積むということもなく、ただ観音を念じたり、礼拝恭敬したりしているだけである。思うに、それは法華経普門品に、一心に観世音菩薩を念ずれば、危害を免れ、願う所が与えられるとある、その経説をそのまま受け取っているものと考えられる。

ところで、その信仰態度を見ると、利益譚十一例中、巻上の(㉗)、巻中の(㉘)・(㉙)、巻下の(3)・(7)・(8)の場合は、観音像という具体的な信仰対象となるもの前で祈願している(前述の靈威譚三例の場合も観音像に対する信仰である)。今、巻中の(6)「孤の嬢女、観音の銅像に憑り敬ひ、奇しき表を示して、現報を得る縁」を例として、その信仰の有様を述べると——殖槻寺の辺の里の孤の女は「観音菩薩は、願ふ所を能く与ふ」と聞いて、観音像の御手に繩をかけて引き、花香燈を供養し、福分を願って「我乃ち一子にして、

父母無く、孤にして唯独居り。財亡く家貧しく、身を存ふるに便無し。願はくは我に福を施せ、早く覓へ、急に施せ」と言つて、昼夜に泣き願う。……その女は里の独り暮しの男と結婚するが、男に「我飢多たり。飯を賜へ」と言われ、女は大いに嘆きて、口を漱ぎ、手を洗つて堂の内に入り、観音像に繋けたる繩を引いて泣きながら「恥を受け令むること莫かれ。我に急に財を施せ」と言う、(すると、観音は一人の女に化して、百味の飲食・絹・米などをその女に与えた)とある。この場合、孤の女は観音に無理なことを強引に願つており、身勝手な態度である。このように身勝手な態度はこの例だけではなく、巻中の(42)、巻下の(3)等にも見られる。

さらに、注意すべきはこの女が観音像の御手に繩をかけて祈願していることである。同様の例は、巻下の(3)に、僧弁宗は十一面観音菩薩像に向い、観音の御手に繩をかけ、それを引いて「我に錢を施せ」と祈願したとある。このように、人々が観音像の御手に繩をかけて祈願したのは何故かと言えば、そうすることによって直接観音の靈驗威光にすぎり、観音の御心を揺り動かして、その利益を得ようとする、いわば熱烈な、直接的な欲求の現われであると考えられる。即ち、祈願者の欲求の熱烈さが、ただ漠然と観音

を念ずるのではなく、眼前の観音像に対する祈念という形をとり、さらには観音像の御手に繩をかけるという直接談判とでも言うべき行為となつたのであると考えられる。

そして、そのように観音に祈願すれば、観音はいかなる人に対しても最終的にはどのような願ひでも適えて下さるのである。観音は真にありがたい菩薩として受けとられ、信じられていたのであるが、これは観音を念ずれば悉くその願ひが満たされるといふ法華経普門品の経説に依つていふことは言うまでもない。「因みに、法華経と観音の信仰が結びついた例は、巻上の(49)「法花経を憶持し、現報を得て奇しき表を示す縁」や、巻下の(43)「法花経を写さ將として願を建てし人、日を断つ暗き穴にて、願力に頼りて、命を全くすること得る縁」などに見られる。即ち、持経者丹治比氏や鉄掘人が善報を得ることができたのは「法花の威神、観音の験力」(上18)・「法花経の神力、観音の最眞」(下13)であると信じられている。つまり、両話は法華経・観音が結びついた靈驗譚であり、これは後に述べる『法華験記』に多く見られるものであるが、『靈異記』にも二例見られることは留意すべきである。

その他、観音靈驗譚ではないが、観音経(観音品)の靈驗を説く話が二例ある(巻上の(49)・(50))。即ち、巻上の(49)の場合は観音品説諭により悪報からのがれるという功德譚であるが、巻上の(50)の場合は観世音経を書写した者が地獄に行き観音経の化身たる少子に助

けられるという利益譚である。両方とも法華経（観世音菩薩普門品）の靈験譚と言うべきであろうが、後者の場合、観音経が少子に化して、観音の如き役割を演じていることは興味深いことである。

以上、要するに、『靈異記』においては、観音に対して現世利益を願う信仰が多く見られ、しかも具象化された観音像に対する信仰が多く見られると言えよう。

二

次に、『法華験記』に観音靈験譚は十三例（巻上の⑩・⑪・⑫・⑬、巻中の⑭・⑮、巻下の⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔）ある。これ以外にも観音菩薩に関する記事がある（巻上の①、巻下の②・③・④）が、それらについては、後で多少触れることにする。

右の十三の靈験譚で注意すべきことは、第一に『靈異記』の靈験譚に見られた靈威譚はなく、全て利益譚であること、第二に『靈異記』に見られない地獄利益譚や極楽往生譚など僅かながら後世に関する説話が見られることである。

さて、人々は観音に何を願っていたのかと言えば、巻上の⑩に、沙門安勝は長谷寺の観音に「何の因ありて我が身黒色なるや、観音の神通により宿世を知らしめ給え」

と祈念したとあり、巻上の⑪に、沙門惠増は法華経の中の二字だけでも暗記できなかった故、長谷寺の観音に祈願した^④とあるが、この二例以外の場合には観音に対して特に何かを願うということはないのである。つまり、巻下の⑯・⑰・⑱などの靈験譚を見ても結果的には観音の利益を蒙っているが、それは日頃からの信仰の賜物であり、最初から観音に利益を願っていたのではなかった。前述の『靈異記』の場合、人々は金銭財宝や病の回復などの現世の利益を目あてにして観音に祈願したのであるが、それとは大分異なるのである。

ところで、人々の観音に対する信仰態度はどのようなものであるかと言うと、例えば、巻下の⑮に、沙門感世は佛像を造るを以てその所作となし、しかも法華経を読む、毎日必ず一品一巻を読む、その中普門品一品を暗誦し、日々必ず三十三巻を誦す、また十八日には持斎し、観世音菩薩に奉仕す、とあるように、大抵の場合、常日頃から法華経（特に観音品即ち普門品）を読誦し、また毎月十八日の観音の縁日には観音に仕えるという非常に真摯な態度である。これも前述の『靈異記』の靈験譚に見られた一方的に身勝手な願いごとをする態度とは大変異なるのである。

さらに、『法華験記』の靈験譚で注意すべきことは観音

菩薩と法華經とが並行して信仰されていることである。

『靈異記』にもその芽えが見られることは前述の通りであるが、『法華驗記』においては、多くの場合(前述の如く)法華經(特に普門品)を誦誦し、觀音に奉仕するという具合に、法華經信仰と觀音信仰とが結びついているのである。「上述の如く、大抵の者は法華經と觀音とを併せて信仰しているが、例外もある。つまり、卷上の四に、沙門源尊は毎日法華經を数部誦誦していたが、重病の為に死んで冥界に行ったが、法華經の受持者であるが故に觀音に助けられて蘇生したとある。即ち、この場合は特に觀音を信仰していたわけではないが、法華經の持者であった為に觀音の利益を蒙ったのである。因みに、法華經普賢菩薩勸發品に「後の五百歳濁世の中に於て、其、是の經典〈法華經〉を受持すること有らん者をば、我へ普賢菩薩」当に守護して、其の衰患を除き安隱を得しめ、伺ひ求むるに、其の便を得る者無からしむべし」とある。『法華驗記』に、法華經の持者好尊や、真遠・光空が、いずれも急難にあり、嘆いていると、普賢菩薩は自ら靈驗を示して持經者を助けたという説話があるが、これは、勸發品に説かれた文に依っていることは明らかである。ところで、『法華驗記』卷下の四に、比丘尼願西は「法華經を誦誦し、しかも、後、經の甚深の理を解了す。その心は柔軟にして正直無偽なり。全く戒律を護り、深く罪根を怖る。……食はただ命を支う。その余分をもつて、普く孤露貧賤の類に施し、さらに貧

利なし、普賢は來護し、觀音は摩頂す。是の如くの奇事は時々常に在り。」とあるが、この記事から、普賢・觀音は、ともに法華經の受持者を守護すると信じられていたことが知られる。即ち、普賢・觀音は、持經者を守護するという点では同等に考えられていたと言えよう。つまり、この源尊の説話(卷上四)の場合も、普賢菩薩勸發品の「法華經を受持する者を守護する」という文に準拠したものと考えていいと思う。

右記の場合とは逆の例であるが、下卷の四に、鷹取りの男は災難にあつて、觀音を念じたところ、大蛇と化した法華經に助けられたとある。つまり、法華經を受持していると、觀音の加護を蒙ることができると同じように、觀音を念ずると、法華經の利益にあずかることができると信じられたのである。即ち、觀音と法華經とは通じあうものとされていたと考えられる。」

さて、前述の如く『法華驗記』には現世利益譚のみならず、冥界利益譚や地獄利益譚が少々見られる(卷上の四、卷中の四、卷下の四)。冥界や地獄における利益譚と言え、先ず地藏菩薩の靈驗利益が念頭に浮かぶ。実際『今昔物語集』卷十七の地藏菩薩靈驗譚三十二話の内、半数近くの十四話が冥界あるいは地獄における靈驗利益譚である。つまり、冥界や地獄において衆生を利益する役目は専ら地藏菩薩の担当であったと考えられる。ところが、『法華驗記』の觀音靈驗譚に少数ではあるが、冥界や地獄の利益譚が見

られ、観音が地藏の如き役を演じており、地藏と並んで代受苦の菩薩とされている。

さらに、僅か一例ながら観音に仕えて往生した例がある。即ち巻下の(11)に、筑前国の優婆塞は法華経を読み、普門品を誦し、観音に奉仕していたが、死後その功德で浄土に往生したとある。(その他、巻中の(20)に、沙門蓮秀は冥界で天童より「本国に帰り、法華経を受持し、観音を称念し、生死を離れて浄土に生ぜよ」と告げられたとあり、そこに浄土思想が見られる。また、巻下の(11)にも、鷹取りの男は「(殺生の)罪によって重き苦を感得す。大悲観音、地獄の苦を抜き、浄土に引換し給え」と念じたとあり、ここにも現世の利益を願う気持が強いが、浄土思想が見られる。)このように、観音・法華経を媒介とする浄土思想が見られ、観音は現当二世で靈驗利益を示されると信じられたのである。

なお、観音靈驗譚ではないが、巻下の(8)に、源信僧都は臨終に「近來頻りに観音来現す。是の故に疑いなく必ず極楽に生ぜん」と語ったとあり、弥陀の脇侍としての観音の例が見えている。また、巻下の(22)に、道祖神は沙門道公に法華経を誦読してもらい、その功德で補陀落山に生まれ、観音の眷属となり、菩薩の位に昇ったとあり、補陀落山浄土に対する信仰が一例ながら姿を見せている。

三

最後に、『今昔物語集』に観音靈驗譚は五十五例^⑧見られる(巻十二の(28)、巻十三の(35)、巻十四の(7)・(12)・(20)・(43)、巻十六の(1)・(40)、巻十九の(30)・(42)、巻二十四の(25)、巻二十六の(3)、巻二十七の(13)・(14)、巻三十の(6))。この他に観音菩薩に関する記事が十七例ある(巻十一の(1)・(13)・(17)・(31)・(32)・(33)、巻十二の(11)、巻十三の(34)、巻十五の(16)・(23)、巻十七の(19)、巻十九の(11)、巻二十の(12)・(20)、巻二十九の(17))。例えば、巻十一の(31)・(32)・(33)などには、長谷寺・清水寺・龍蓋寺などの縁起が述べられ、その後に各寺の本尊である観音の靈驗殊勝なることが付け加えられているが、説話の中心は寺院の縁起を記述するところにある(この他、巻十一の(13)・(30)も類似説話である)。また、聖徳太子は〈救世観音〉の化身と信じられた話(巻十一の(1))或いは、王藤大主は観音の化身〈王藤観音〉と信じられた話(巻十九の(1))なども観音に関する話ではあるが、観音靈驗譚とは趣を異にしている。以上のような説話からも観音信仰の一端を窺い知ることができるのであるが、今は観音靈驗譚を中心にその内容を考察しようと思ふ。「尚、以上の〈本朝の部の説話〉七十二話の外に、天竺・震旦の部に観音靈驗譚が八例(巻四の(17)・(23)、巻五の(1)・(2)・(3)、

卷七の(6)・(20)・(28)、また観音菩薩に関する記事が二例(卷六の(8)・(87)あるが、ここで取りあげる余裕はないので、別の機会に述べることにする。)

さて、右記の観音靈驗譚五十五話(注⑧に記したが、五十五話の内、卷十六の(40)・卷二十七の(44)の三話は、未完、或いは表題のみであるから、実質的には五十二話)は、『靈異記』や『法華驗記』に基づいて構成されたものが多い。左記の如く、出典のちがいによって、(A)・(B)・(C)の三群に分けることができる。但し、『善家秘記』に依ったと考えられる卷十六の(47)は、便宜上(C)群に入れることにする。(尚、『今昔物語集』の説話番号の下の「」内は『靈異記』或いは『法華驗記』の説話番号を示す。)

- (A) 『靈異記』に依った観音靈驗譚。卷十六の(1)〔上6〕、同卷(2)〔上17〕、同(8)〔中34〕、同(10)〔中42〕、同(11)〔中36〕、同(12)〔中37〕、同(13)〔中17〕、同(14)〔上31〕、同(23)〔下12〕、同(27)〔下3〕、同(38)〔中11〕。(以上十一話)
- (B) 『法華驗記』に依った観音靈驗譚。卷十二の(28)〔下10〕、卷十三の(35)〔上28〕、卷十四の(7)〔下14〕、同卷(12)〔上31〕、同(20)〔上26〕、卷十六の(3)〔下15〕、同卷(5)〔下85〕、同(6)〔下13〕、同(16)〔下13〕、同(25)〔下107〕、同(26)〔下14〕、同(35)〔下16〕、同(36)〔中70〕。(以上十三話)

- (C) 出典未詳の観音靈驗譚。卷十四の(43)、卷十六の(4)・(7)・(9)・(15)・(17)・(18)・(19)・(20)・(21)・(22)・(24)・(28)・(29)・(30)・(31)・(32)・(33)・(34)・(37)、卷十九の(39)・(40)・(41)・(42)、卷二十四の(25)、卷二十六の(3)、卷二十七の(13)、卷三十の(6)。(以上二十八話)

右記の(A)『靈異記』に依った観音靈驗譚(十一話)或いは(B)『法華驗記』に依った観音靈驗譚(十三話)は、その出典である『靈異記』或いは『法華驗記』の〈漢文体の文章〉を〈和漢混淆文〉にかえ、多少の潤色を加えたものであるが、説話内容は『靈異記』或いは『法華驗記』の場合と大体同じである。従って、観音菩薩に対する信仰の内容も前述の『靈異記』或いは『法華驗記』の場合と大差はない。細かい点については記すべきこともあるが、紙数の関係で(A)(B)については割愛し、(C)の出典未詳の(『今昔物語集』独自の)観音靈驗譚について考察しようと思う。

出典未詳の観音靈驗譚(二十八話)の中には、①『靈異記』に見られた観音靈威譚は一例もなく、全て観音利益譚である。②『法華驗記』に見られた冥界利益譚・地獄利益譚、或いは往生譚は一例もなく、全て現世における利益譚である。

さて、人々は観音に対して何を願い、何を求めていたの

かと言え、或者は金銭財宝を願ひ、或者は病氣の回復を願ひ、或者は急難を免れんことを願つて、観音に祈念してあり、いずれの場合も現世の利益を願ひ求めていたと言えよう。但し、次のように、後世を願ひ信仰も僅かながら見られる。即ち、卷十六の(四)に、宮仕えの女は盜賊なる男の素性を知つた為、その男に殺されようとした時、観音に「此ノ世ハ此テ止ナムトス。後生助ケ給ヘ」と祈念した(その結果、難をのがれた)とあり、卷十六の(四)に、瘧の女は石山の観音に「我が此ノ病ヲ救ヒ給ヘ。若シ、前世ノ悪業重クテ、救ヒ給ハムニ不能ズハ、我レ、速ニ死ナム。必ズ、後世ヲ助ケ給ヘ」と念じた(その結果、病はなおつた)とある。宮仕えの女も、瘧の女も、一応(後世(後生))を助け給へと念じてはいるが、その信仰内容は、現世の利益が与えられないのならば、せめて後世だけでも苦しむことのないように助けてほしいと願つてゐるのであり、現世利益的な信仰がその根底にあると言えよう。

ところで、人々の信仰態度はどのようなものかと言うと、例えば、卷十六の(四)に、一人の青侍は長谷寺の観音に「我レ、身貧クシテ一塵ノ便無シ。若シ、此ノ世ニ此クテ可止クハ、此ノ御前ニシテ干死ニ死ナム。若シ、自然ラ、少ノ便ヲモ可与給クハ、其ノ由ヲ夢ニ示シ給ヘ。不然ラ

ム限りハ更ニ不罷出ジ」と、ハンストをして祈願したとあり、それは全く一方的な身勝手な態度である。同様の例は、卷十六の(四)・(五)・(六)などにも見られるが、その他の場合も大同小異である。

右に述べたような信仰態度は、前述の『靈異記』の靈驗譚に見られる信仰態度とよく似ているが、異なる点は、大抵の人が長谷寺・清水寺・石山寺などの特定の寺院の観音に祈願していることである。即ち、出典未詳の靈驗譚二十八例の内、清水寺の観音に祈願したものは八例(卷十六の(九)・(十)・(十一)・(十二)・(十三)・(十四)・(十五)・(十六))あり、長谷寺の観音に祈願したものは七例(卷十六の(十七)・(十八)・(十九)・(二十)・(二十一)・(二十二)・(二十三))、卷二十四の(二十四)・卷三十の(二十五)あり、石山寺の観音に祈願したものは二例(卷十六の(二十六)・(二十七))あり、成合寺・六角堂の観音に祈願したものは各一例(卷十六の(二十八)・(二十九))あり、合計十九例ある。もつとも、『靈異記』の靈驗譚にもこれと類似した例が全然ないというわけではない。前にも述べたが、卷下の(三)に、沙門弁宗は「泊瀬の上の山寺に登り、十一面菩薩に参る向く。観音菩薩の手に繩を繫け、引きて」祈願したとある。しかし、『靈異記』の場合、前述のように、信仰の対象となるのは十一面観音(或いは千手観音・聖観音)などの観音像である。それに対して、この場合は、観音

像ということは問題にされていない。というのは、例えば、長谷寺の観音に祈請したとあるが、長谷寺の十一面観音像に祈請したとは記るされていないのである。同様のことは清水寺・石山寺などの観音についても言えることである。つまり、『靈異記』の場合、観音像に対する信仰が中心をなしているが、この場合は観音像ということは問題にならず、長谷寺・清水寺・石山寺などの特定の寺院（いわゆる観音霊場寺院）の観音に対する信仰が中心になっていると言えよう。

ところで、言うまでもなく観音は慈悲深い靈験あらたかな菩薩とされているのであるから、観音であるならば、この観音であろうと、本質的には何ら変わるところはない筈である。しかるに、なぜそのように長谷寺・清水寺・石山寺などの観音が特に信仰されたのであろうか。既に、この問題については岡崎知子氏が「平安朝女性の物語」（『国語と国文学』昭和四十一年二月号）で述べておられるが、要するに、神道の影響を受けて地主神の有する地域性と人格神の有する特殊性とが仏・菩薩の上に移ったために、初瀬の観音は初瀬という特定の地域の観音として、同様に石山の観音は石山という特定の地域の観音として信仰されたと考えられる。

しかも、それら寺院の観音に利益を願う場合、殆んど人は、直接その寺院に参詣している（但し、卷十六(四)は例外である）。このように各寺院へ直接参詣したのは何故かと言えば、前述のように、例えば、初瀬の観音は初瀬という特定の地域の観音と考えられたのであるから、初瀬の観音の利益を得ようとするならば、各人の家から遙拝するのではなく、その靈験の及ぶ初瀬の地へ出かけて行って祈願しなければならぬと信じられたからである。また、岡崎知子氏が言われるように、当時寺に詣でること自体が立派な善根であると信じられた為でもあろう。さらに、観音の衆生救済の悲願にすがり、同情を得んが為に直接その寺院に足を運んだとも考えられる。それは次の記事からも窺える。即ち（前に引用した話であるが）卷十六の(四)に、京の青侍は長谷寺の観音に福利を強引に願ひ求めたところ、三七日を経て、夢に（観音より）「汝が前世ノ罪報ヲバ不知ンテ、強ニ責メ申ス事、極テ不当ズ。然レドモ、汝ヲ哀ガ故ニ、少シノ事ヲ授ケム。……」と告げられたとある。

以上は、単に現世の利益を願って、清水寺・長谷寺・石山寺などの観音を信仰した例であるが、僅かながら、日頃から観音を信仰していたため特に助けを求めるまでもなく観音に守護されたという例がある。即ち卷十六の(四)に、

「毎月ノ十八日(ニ)持齋シテ、観音ヲゾ念ジ」ていた郎等源二は、海の沖に押し流されたが、観音の助けによつて生還したとあり、卷十九の(三)に、「心直クシテ因果ヲ知テ……十八日ニハ持齋ニテ、年来、観音ヲ念ジ」ていた五位は、美濃の守に呼ばれて仕事をしていると、俄に大木が五位の上に落ちたが、観音の助けにより事無きを得たとある。現世の利益を得んが為に観音を祈念する人が多かった中において、このような観音信仰の人もいたことは注意すべきである。

なお、観音靈驗譚ではないが、卷十五の(四)に、丹後国の聖人は迎講の日「観音、紫金台ヲ差寄セ給タル(時に)」往生したとあり、卷二十の(四)に、「観音、紫金台ヲ捧テ、聖人ノ前ニ寄り給フ。聖人、這寄テ其蓮花ニ乗ヌ、仏、聖人ヲ迎取テ、遙ニ西ニ差テ去リ給ヌ」とあり、僅かながら阿弥陀仏の脇侍としての観音に対する信仰の例が見えてくる。

むすび

以上、大雑把ではあるが、平安朝仏教説話集に見られる観音信仰について(『靈異記』・『法華験記』・『今昔物語集』の観音靈驗譚を中心に)検討してみた。

要するに、人々は観音を慈悲深い靈驗あらたかな菩薩と信じ、大抵はその観音に金銭財宝や病の回復、或いは急難を免れんことなど、現世の利益を願い求めている。それに対して、観音はどんな無理な願いごとでも聞き入れ、人々を救助されるのである。観音は真に有難い菩薩とされているのである。但し、信仰の有様は各説話集によってかなり差異がある。顕著な点をあげると、(一)『靈異記』の観音靈驗譚には具象化された観音像に対する信仰が多く見られ、(二)『法華験記』の観音靈驗譚には法華経信仰と強く結びついた観音信仰が多く見られ、(三)『今昔物語集』の場合、『靈異記』・『法華験記』に依つた観音靈驗譚には(一)・(二)と同類の信仰の形も見られるが) 出典未詳の『今昔物語集』独自の観音靈驗譚には長谷寺・清水寺・石山寺などの特定の寺院の観音(即ち日本化した観音)に対する信仰が多く見られるのである。以上は、信仰の形態は異なっているが、いずれも観音を独立した菩薩として信仰し、大抵は現世の利益を願い求めているのである。それに対し、阿弥陀仏の脇侍としての観音に対する信仰は、ほんの僅かしか見られないのは注意すべきである。

なお、言及できなかった点が多々あるが、それらについては別の機会に述べたいと思う。諸賢の御批判を仰ぐ次第

である。

註

- ① 日本古典文学大系『日本書紀』(下)、四八〇ページ。
- ② 同右、四九六ページ及び四九八ページ。
- ③ なお、巻下の(84)に、「頸に瘻肉疽を生じ」苦しんだ女が、薬師経・金剛般若経・観世音経などを読誦し、その功德で平癒したとあり、観音経だけの靈驗譚ではないが、巻上の(18)・(20)に類するものである。
- ④ 『法華驗記』に長谷寺の観音に祈願する話が二例あるが、このような例は『今昔物語集』に多く見られる。後に詳しく述べるが、長谷寺などの特定の寺院の観音に祈願するという信仰形態は『今昔物語集』独特のものと言えよう。『法華驗記』にもその例が二例みられることは注意すべきである。
- ⑤ 島地大等『漢和対照妙法蓮華経』六〇一ページ。
- ⑥ 巻中の(61)・(71)・(72)。
- ⑦ 『今昔物語集』巻十七に、冥界利益譚は十二例(第十七・十八・十九・二十・二十一・二十二・二十三・二十四・二十五・二十六・二十八・二十九話)あり、地獄利益譚は二例

(第二十七・三十一話)ある。

- ⑧ 尚、巻十六の(8)及び巻二十七の(14)は未完であり、巻十六の(40)は「十一面観音、変老翁立山崎橋柱語」という表題のみであるが、一応、数に入れておく。

※ 補註▽観音菩薩に関する話は『靈異記』に十八例(観音靈驗譚十四例・関連記事四例↓62ページ)、『三宝絵詞』に三例(巻中の(1)、巻下の(20)・(22))、『極楽記』に三例(第一・十七・十八話)、『法華驗記』に十七例(観音靈驗譚十三例・関連記事四例↓65ページ)、『今昔物語集』に八十二例(本朝の部▽観音靈驗譚五十五例・関連記事十七例、(天竺・震旦の部)▽観音靈驗譚八例・関連記事二例↓67・68ページ)ある。

※ 『靈異記』の引用文は日本古典文学大系本の訓読文に、また、『今昔物語集』の引用文も日本古典文学大系本によった。なお、『法華驗記』の場合は、原文を書き下して引用した。その際、国訳一切経所収(藤本智重訳)本を参照させていただいた。(本学助手、国文学)